

# 性差の違いから考える社会

▼お茶の水女子大学 理事・副学長

石井クワツ昌子(いしいくんつ・まさこ)



ワシントン州立大学で博士号取得。カリフォルニア大学リバーサイド校で20年間教鞭を執り、2006年にお茶の水女子大学に着任。2021年から現職、2022年からジェンダード・イノベーション研究所長を兼務。専門は家族社会学で、日本、米国、北欧諸国にて家庭内性別役割分業について研究を重ね、2012年に全米家族関係学会の「Jan Trost賞」受賞。日本家族社会学会会長、日本社会学会常務理事、日本家政学会家族関係部会役員、日本学術会議連携委員、内閣府男女共同参画会議専門委員などを歴任。国際的活動としては、国連家族年の基調講演、国連専門家会議メンバーなどがある。「育メン」現象の社会学：育児・子育て参加への希望を叶えるために」(ミネルヴァ書房)など著書多数。

## ジェンダード・イノベーションとは何か

ジェンダーという言葉はよく見聞きするでしょうが、ジェンダード・イノベーションは初めて聞くという人がまだ多いでしょう。生物学的な性別(sex)に対して、ジェンダー(gender)とは社会的な性別のことを指し、「男性(あるいは女性)のあるべき姿」として、われわれが属する社会や文化から規定されます。典型的な例としては、服装、言葉遣い、職場や家庭における役割などで見られる性別であり、人の意識にも反映されます。日本ではジェンダーという言葉が単一で用いられることは珍しく、ジェンダー平等、ジェンダーフリー、ジェンダーギャップ、ジェンダーバイアス、ジェンダーアイデンティティなどの文脈で使われる場

合が多いでしょう。

それではジェンダード・イノベーションとは何でしょうか。まずジェンダーとジェンダードの違いですが、前者は既述したように社会的に作られた性別であり、後者には「性差に注目する」という意味があります。性差にこだわるジェンダードという言葉は、一見するとジェンダー平等から逆走しているのではと捉えられがちですが、実はジェンダー平等にせよ、ジェンダードにせよ、めざす方向性は、女性および男性のウェルビーイングを向上するというところであり、大した違いはないと考えます。なお、ジェンダードにイノベーションを付けると、「性差に着目しながらあらゆる性にとってより良い生活をもたらす技術革新を行う」という意味を持ちます。

このジェンダード・イノベーション

を提唱した米国スタンフォード大学のロンダ・シービンガー教授は科学史が専門であり、過去の研究は男性基準で進められたために、性差が見過ごされ、研究成果を基にした開発は女性にとって危険なものが含まれていたと指摘しています。また、ジェンダード・イノベーション視点というのは、性差分析だけではなく、ジェンダー以外の属性、たとえば人種、社会階層などとの交差性(インターセクショナルリティ)についても検討することを重要視しています。本稿では、性差が見過ごされてきた事例について紹介し、ジェンダード・イノベーション視点に敏感(センシティブ)になるとはどういうことなのかについて考えてみたいと思います。

## 事例 性差が見過ごされてきた

近年、性差や交差性に注目した研究が増えてきているのは薬学や医学領域です。裏返して言うと、これらの領域における過去の研究では性差が頻繁に見過ごされてきたことが、問題視されていたということですが、かつては女性やメスのマウスは妊娠や出産、性周期があるために、臨床実験に向かないと信じられていました。そのため、性差に注目せずに米国で商品化された薬品が女性には健康上のリスクがあるということがわかり、市場から撤退された例もあります。ある睡眠導入剤のケースでは、服用後、女性の居眠り運動頻度が男性よりも5倍程度高かったということがわかり、現在では女性用の薬は男性の半量で販売されています。

ジェンダード・イノベーションで注目する性差は、女性が不利益を被っている分野だけではなく、男性にとって

も問題が生じている事例があります。たとえば、乳がんは女性の病気という

ジェンダーバイアスがあると思います。確かに米国のデータでは、女性の場合には生涯を通じて8人に1人が罹患するのに対して、男性では1000人に1人と少ないです。日本でも国立がん研究センターのデータによれば、乳がんのうち男性が占める割合は0.7%とかなり低いのですが、男性の罹患率は増えてきているとのことです。問題なのは乳がんの生存率であり、3年生存率、5年生存率、全生存率のすべての割合において男性の方が低いことがわかっていきます。これらの性差のデータから見えてくるのは、男女の乳がんの臨床特徴が違う可能性であり、また男性に対する過小治療の見直しの必要性だと思えます。

薬学や医学のような理系分野だけではなく、社会科学系の研究でもあまり男女差に注目してこなかった事例があります。たとえば育児や子育てに関する研究です。日本では2000年代に入り、育児を望む父親が増えてきていますが、乳幼児を連れ外出時に男性がベビー休憩室を利用しにくいことや、ベビーカーの背丈が男性にとっては低すぎるために使い勝手が良くないなど、育児経験には男女差が存在しています。しかし、これらの性差はあまり検証されず、その結果、男女差に配慮したイ

ノベーションにつながった例はあまり多くありません。

薬の開発や医学的治療に性差や交差性の視点を取り入れるのは必須ですが、同じような問題が工学やAI関連でも起きています。その中でもよく知られているのは、過去のシートベルト衝突実験に男性サイズのダミー人形しか使われていなかったことです。このような実験データをもとに作られた男性仕様のシートベルトの着用により、交通事故が起きた場合に女性の方が重傷を負う割合が高いこと、さらに従来のシートベルトは胎児の死亡率を上昇させていることなどが明らかになっています。

AI関連では、顔認識、マシンラーニングなどにおける性差が指摘され始めています。最近ではセキュリティ重視の職場が多くなり、顔認識制度が取り入れられてきています。またスマートフォンなどにおいても、これまでの指紋認識から顔認識に変わってきているケースが目立つようになってきています。しかし、米国の研究によれば、男性に比べて女性の顔の誤認識率が約18%高いことがわかっています。この理由として考えられるのは、女性の方が化粧をしている確率が高いことや、ヘアスタイルが頻繁に変化することなどが挙げられていますが、より深刻なのはこのソフトを作るうえで必要な

データベースに女性の顔があまり登録されていないかったために、誤認識が起こると言われていることです。

他にも最近話題になっている生成系AIですが、この基となるデータにジェンダーバイアスが潜んでいるのではないかという指摘があります。これらの生成系AIは機械学習（マシンラーニング）のモデルの一種であり、学習済みのデータを活用して新たなデータを生み出すものです。しかし、このマシンラーニングはこれまで蓄積されてきたデータを使っており、その中には男女に関するバイアスが多く入っている場合もあります。たとえば、男女を表す形容詞の変遷を見ると、男性で1位に入ってくるのが「勇敢」や「名誉ある」ですが、女性の場合は「チャーミング」や「繊細」などにジェンダーバイアスが存在します。要するに、ジェンダーバイアスとはかけ離れたところに存在すると思われるがちなAIのデータであるにもかかわらず、実はバイアスを多く含む過去のデータが基になっているという問題があるわけです。

## ジェンダー・イノベーションの気づき

ジェンダー・イノベーション視点を取り入れた研究は、さまざまな分野で増えてきています。その結果、女性

にとっても男性にとっても、さらに多様なジェンダーアイデンティティを持つ人にとっても、安全な生活を提供し、さらにウェルビーイングの向上に貢献できるモノ（物品）やコト（サービス）が増えていくと予想します。しかし、ジェンダー・イノベーションは学術界や産業界だけに限定した視点ではなく、むしろわれわれが毎日の生活の中で不思議に思うこと、必要と感じることの中にジェンダー・イノベーションの種があることが多いと思います。

われわれの生活はジェンダー・イノベーションの宝庫なのです。たとえば、使い勝手の良くない背の高い冷蔵庫や食品棚、男女差を無視したコロナワクチンの投与量、ポケットが少ない（付いても小さい）女性の洋服、手が届かない電車の吊り革など、（すべて筆者の経験ですが）このような日常生活の中にある「不思議」からジェンダー・イノベーションについて考えることが可能になるでしょう。さらに、そこから生活に役立つ、使いやすいものが生まれてきます。つまり、すべての人たちの安全と健康につながるジェンダー・イノベーションは、われわれの毎日の生活からの気づきによって始まると言えます。今からでもいいので、身近な生活上に転がっているジェンダー・イノベーションのシーズを探しに行きませんか。